

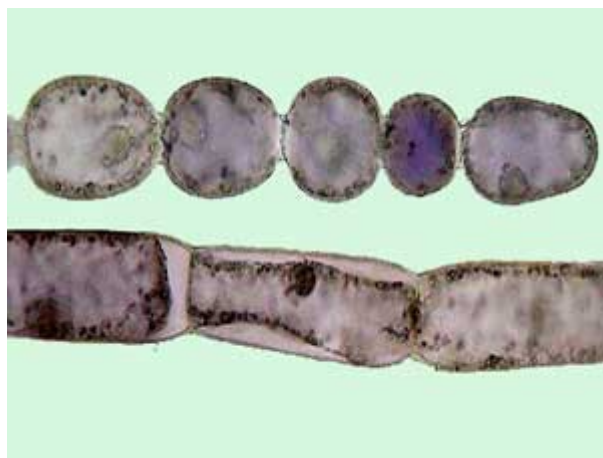
■ ムラサキツユクサ・・・



気孔・原形質流動・減数分裂……、何やら難しそうな用語を並べましたが、小学校から高校の理科（生物）に登場する言葉です。そして、そのいずれの実験においても活躍するのが、このムラサキツユクサです。当団地では、六小脇のカイドウ周辺にたくさん咲いています。

原産地は北アメリカで、日本のツユクサとは少し趣も異なります。ただどちらも梅雨の時期に咲くところが日本的であり、名前の由来もそこにあるようです。雨粒を乗せ湿潤感たっぷりの花には、思わずはっとさせられる美しさが秘められています。残念ながらその命は1日持たず、朝咲いて午後には萎んでしまいます。ただ、たくさんのつぼみがあって順次咲くので1日花であるとはわかりにくいかもしれません。

花弁は3枚。直径は2 cm～3 cmほどで、ガク片も3枚、雄しべは6本です。そして、雄しべのつけ根には細く長い糸状の毛がモシャモシャと生えていますが、これが、冒頭に挙げた「原形質流動」の観察に最適なのです。「原形質流動」とは、細胞内部の原形質が流れるように移動しながら、さまざまな生体分子を運ぶ現象をいいますが、この毛の細胞は一つにつながってできているので、そのうちの1本を顕微鏡で観察すれば、細胞が重なって観察し難いということがないからです。また、もともと青い色をしているので染色しなくても良いということも大きな理由です。



また、光合成の学習時に観察するのが「気孔」です。これは、植物の葉において外部から空気を取り入れるための穴ですが、ツユクサの仲間はどこにでも咲いている上に、表皮を簡単に剥がしやすい性質があるからです。

ところで、園芸的に改良された植物は、学名や和名が混乱していることがよくあります。ムラサキツユクサも例外ではありません。基本種はヌمامラサキツユクサとも呼ばれ、染色体数は $2n=12$ ですが、染色体数が倍加して $2n=24$ となったものは、花が大きく、全体的にも大型になり、オオムラサキツユクサとも呼ばれています。こうした減数分裂時における、様々な過程やケースを調べるときも、ムラサキツユクサの花粉はよく使われます。

今回はまるで生物の授業のようで難しい内容になってしまいました。恐縮です。